

## 己れの告白

K S

僕は、何故にこんな六づかしい複雑なところが好きなんだろう、色彩——明暗——調子——配合——構圖なんてマア、數え上げたら實際困難で益々六づかしい。

而し、自然の美をば師に仰ぎ彩筆を友として寸暇にも郊外に馳せつけて、その自然の美に接せんか、刻々にして紙面には自然の情趣が現はれんにあゝ其の快感や何にたとふる物ぞあらむ：と、僕はこの楽しい愉快な興味を以て目下の苦難を忍んでいよく斯道を究めむと欲して居るのである。

だが僕には一の苦痛がある其れは僕、こゝに在つては充分にその途を執るの餘地が無い、先づ第一に奉公中の身、業務が忙しい、家が貧しいのであるから専らこの道を講じ究むることが到底覺束ない。實際僕は一本の筆一片の紙だも、求めんとしても、なか／＼容易でないから。繪の修業など望んだとてどうして出來やう筈がない。

家が貧しいので奉公に出される、して其の先は事が多くつて忙しい、少しの暇もない、日日仕事で身の疲れる位ぬ、ヤツと小使錢を貯へて、ポロ繪具でも求め、一片の紙を得たとしても繪をかく暇がない、たま／＼暇を得たりとしても、いつも夜でそれも九時か十時なのだ。

けれ共僕が當所へ奉公に來たのは外でもない、實は自分で望んで來たのである、それはこの業も僕の目的たる畫と關係の淺さからぬ否最も適當だと思ひ、依つて招牌の畫なりにもせよ習修

せんと考へて入店したんだが、なかなか自分の思ふ様にはゆかぬ。

さうだ、僕が來た翌年の二月、有斐舎てふ洋畫研究所へ入舎した、其の時の嬉しかつたと未だに忘れられない。是から一の師の許にて熱望して居る途に就くのだから此の上もない喜ばしかつた。こゝ一つ一生懸命に奮發せんと決意しつゝ就學し初から鉛筆畫を究めた、二ヶ月で三枚寫した、之も暇に乏しい故だが仕方がない、假令一ヶ月一枚たりにもせよ師に依つて學ぶに如かずと楽しんで居たが、業務の忙しさに四月になつて中止せねばならぬことになつた、あゝ悲しかつた、悲しかつた。

失望した僕を顧て友の某は勵ましてその代りに、東京の繪畫講習會へ入會すべしと諫められた、轉じて今度は同會洋畫科に入會した、時は九月、爾來講義録に就いて獨習して居つたが、終業も迫つて來たから今度は何か好い書はあらんかと思ひつゝゐたところ、たま／＼廣告欄に『みづゑ』の掲載してあつたので試みに一部取寄せて見たら良師と仰ぐべき斯道の指導者たるに續いて専ら『みづゑ』を無二の友として己れの悶へを慰さめつゝ今日迄に到つたのである。

而し元より忙しいのだから執筆すべき機がない又是に伴はつて僕には金錢の餘裕がないのであるから『みづゑ』の誌代も僅か一ヶ月分かよく／＼三ヶ月分送金して居つたが、是も僅かの小使錢を貯蓄しつゝ節約しても誌代の送金に苦しみつゝ居つたのだ。

日本水彩畫會の規定を一讀した時すぐ入會がしたいと思つにが例の時も金も許さなかつた。

今度はいよゝゝ入會の機に接した。暇も不十分ながら忙しい仕事をさいて與へられた様になつた、まあどうやら望みの一端は達せられて嬉しい。

僕は今迄展覽會を観たところが七八度諸大家の作に接したと僅か二度しかない、いつも展覽會を観る度毎に僕の腦は深く強く刺激されて啻に神祕な感に打たれて呆然として仕舞ふのであつた。

あゝ、僕は何故にこんな下らぬとを長々と書いたのだらう？而し僕、目今の心情を斯くもクドクと訴えたのであつて貴重な誌面を汚漬したは實に多罪、免し給へ！切實なる先輩の諸兄よ、希くば、初學なる僕をば、崇高な予一チューアなる趣味の途に導かれむことを！

(完)

## 春の一日

あき 華 洋

好く晴れた微かな風の吹く暖い日であつた。靜と讀書して居るのが惜しい様な氣がしたので、何か寫生をと三脚片手に友のT君を誘つた、何所もゝ一體に淡い霞が棚引いて快よい夢の様な色で塗られて居た。紅の花緑の麥、其所か一面に咲いて居る菜の花、何を見ても皆春らしかつた。

途々水繪の版畫や、石川先生の言はれるスケッチ畫法の事など色々話して歩いた。

美しい小鳥は白い花の梢にチ、と鳴いて居た、暖いポカ／＼し

た日に照されてウツトリ燃えたつやうな若草の道を辿つた。何時の間にか目的の所へ着いてゐた。そこは菅公様の御宮だつた。

深い／＼藍色の乳を含むだ空、枝の垂れた目も覺る計りの櫻、手洗所の汚れた白い青い下げ手拭、參詣の人々、それらの調和がいかに長閑な日永な感じを現して居た。早速イーゼルをひるげた。櫻の色が空よりも沈みさうになつて大變六ヶしかつた畫には大體の調子を忘れてはならいと思つた。眞面目に二時間餘り筆を運んだ。友の畫も出來上つた。それから亦枯葉の残つた松の木を寫した。

日足の大分傾いた頃ソツ／＼と吹く風に送られて歸つて來た。家々には燈火がつひて居た。

## 東京府勸業展覽會の水彩畫

T K 生

何といつても水彩畫は太平洋畫會のことだ。太平洋畫會には水彩畫會といふ團體の出品がある。東京府の展覽會は、白馬會の人が澤山出してゐるが、水彩は實に少ない、その少ない中で南先生と石川先生の作が目につく、他は實にくだらぬものばかり、その日につく兩先生の御作も、格別大したものではない。あゝ、早く太平洋畫會の展覽會が見たい、そして水彩畫の室に一日を暮したい。